授業探訪

総合系科目・スポーツ実習

実技授業としての「阿波踊り」の実践
－「スポーツスタディ 日本文化と踊り」－

全学共通カリキュラム運営センター兼任講師　小林 敦子

I. はじめに

阿波踊りは江戸時代から続く徳島市（徳島城下）発祥の盆踊りであり、昭和初期からの観光政策により現代では年間 100 万人以上の観光客が訪れる若者にも人気の祭りである。「手を上げて足を運べば阿波踊り」という句にあるようにシンプルな所作による自由な乱舞であったが、現代では様式化された統一的群舞となっている。盆踊りと言うと、神社や広場で中央の櫓で歌や太鼓による音頭に合わせ、人々が周囲で円形となり、一方向に進みながら皆が同じ動作で踊る形式を思い浮かべるのではないだろうか。阿波踊りはこれとは異なり、連と呼ばれる多数の集団が踊りながら路上を行進する。連は数種類の和楽器奏者を擁し、踊り手は自前の音楽隊のライブ演奏により踊り、この点がYOSAKOI ソーランとは大きな相違点となっている。阿波踊りで最も大切なことは弾むようなリズムであり、リズムに乗って踊り、見ている者も思わず一緒に踊り出してしまう所に醍醐味があるとされる。この阿波踊りをスポーツスタディ（「日本の文化と踊り」・半期）として行う授業の紹介をさせて頂くにあたり、次章で 6 つの項目ごとに実践内容をお伝えしたいと思う。

II. 授業内容

1. 阿波踊りの授業への組み込み方

[自由型と様式型の組み合わせ]

自由な乱舞としての阿波踊りと様式化された阿波踊りのいずれを主に組み込むか、これがまず悩んだ点であった。様式化された阿波踊りでは女性による「女踊り」と男性による「男踊り」という決まった振り付けの対比的なスタイルがあり、これらのパートが緻密な隊形を整然と替えながら演舞を行うが習得には長期間に多くの練習を要する。かといって自由に踊るよう求めても学生は戸惑う。日本のお囃子や踊りの所作にほとんど触れたことがないためである。そこで両者の折衷案として、基本的な足運びの習得に時間をかけ、各履修生が創作したオリジナルの囃子詞を唱えながら踊る練習をし、次に「男踊り」とその 3 つの応用型および「女踊り」を練習し、最後に履修生がグループ別に阿波踊りの創作作品を発表することとした。「男踊り」および「女踊り」の練習目標は

これらのスタイルを習得するというより、日本の様式化された踊りの身体の使い方を理解し体験することをめやすとした。創作作品の要件は「全員が自分の創作囃子詞を踊りながら唱える」ことのみとし、踊りの各スタイルの取捨選択は自由とした。

[履修生の性差を区別せず踊る]

履修生は性別に関係なく全員が「男踊り」と「女踊り」の両方を練習し、最後の発表では選択を自由とした。中には動作がやりやすいからと「女踊り」を選択する男性もいたが、これは授業のため女装する必要がないため、抵抗がなかったのであろう。

[創作囃子詞]

囃子詞は踊り手の一人がかけ、最後に「ヤットサー」と締め、その他の踊り手が「ヤットヤット」と応じることで踊りのタイミングを揃え、お互いに踊りを鼓舞する機能がある。履修生には自分で囃子詞を創作することを課題とし、掛詞や対句などのレトリックは一切求めなかった。また英語の創作も可とした。掲載許可が得られたいくつかの例を挙げてみよう。

・秋のにおいはいい匂い　柿栗さんまに金木犀　心もからだもいっぱいだ
・腹がへったら飯を食う　眠くなったら昼寝する　気分転換に運動だ
・毎日毎日バイトして　疲れて帰ってくるけれど　ずっと金欠遊べない
・朝から大学 1 限ばかり　だけど火金（かーきん）全休だ　わっしょい
・朝陽の光が差す窓に日常の営みの始まり　笑顔と共に歩み進み幸せな一日が楽しみ
・ひらひら舞上げる青い空に　彩りの風船がゆらゆら揺れる

このように季節感を歌ったもの、日常の喜怒哀楽や心象風景を表したものなどバラエティに富む囃子詞が創作される。最後の 2 首は留学生である。これまでの経験から留学生の作品は、洗練された美しい日本語を駆使し掛詞の使用など凝ったものが多い。

2. 踊りの習得法

[お囃子のリズムを聞き分ける]

阿波踊りは 5 種類の和楽器の合奏であり、その中から「チャンカ・チャンカ」という基本的なリズムを奏する三味線の音を聞き分け踊ることは容易ではない。1 か月目は毎回この音に合わせて手拍子をする練習をしたり、「チャンカ・チャンカ」を唱える練習をした。3 か月目になると「このリズムくせになる」というコメントがあり、「食堂で列になって待っているとき自然と口をついて出て足運びしながら進んでいる」と語ってくれる履修生もいた。

[基礎的な足運びの習得]

阿波踊りの基礎的な足運びは片足ずつ前に出しては少し引く（「男踊り」）という単純な所作であるが、日本の踊りの経験のない履修生は身体全体を使って滑らかに動くことが出来ず、単に足だけを出しての前進となってしまう。「お囃子に合わせて弾むように」と指示すると今度はスキップやヒップホップのようになってしまう。「ぴょんぴょんしないで」と言ってもなかなか難しい。いろいろ模索した結果、「片足を少し後ろに蹴り上げ、弧を描くように前に出し、後ろにすり足で戻すと同時に、もう片方の足を後ろに蹴り上げる」練習がかなり効果的であった。履修生も意識的に足運びをするようになり、「お囃子が早くなると足運びがいい加減になるので、丁寧にしたい」というコメントにそれが表れている。

[1日1分自主練の推奨]

実際にお囃子のリズムにのせて歌いながら踊ることは、歌詞を覚え、お囃子のリズムを聞き取り、そのリズムを身体に入れ込む必要があり、かなりの慣れが必要である。毎日少しずつ踊ることが大切なので、1日1分の自主練習を推奨している。毎回自分の踊りの不足部分を分析し次週までの課題とする履修生、基礎に忠実に練習する履修生は1か月ほどでお囃子に呼応して身体がスムーズに動くようになり、その後の「男踊り」の応用型や「女踊り」の習得も比較的容易であり、踊りを楽しめるようになる。

3. グループ活動と実技前の解説とワーク

スポーツスタディは全体の3分の1程度を講義にあてるとされている。毎回演習室で15-30分程度の時間を使い、各踊りのスタイルの解説・音声や映像の視聴・口三味線や囃子詞についての簡単なワークを行ってからダンスフロアで実技練習をするという段取りで行った。演習室でのワークおよびダンスフロアでの練習はグループリーダー（交代制）を中心に行い、時には囃子詞の比喩表現の意味についてディスカッションを行うなどで内容に関心が深められるようにした。このような作業は演習室の方が集中でき、グループ内で親交を深めることにもなり、毎回演習室を使わせて頂けたことはとてもありがたかった。履修生が連続欠席後の授業でもクラスに溶け込めたのは、初回授業においてグループ内で親しくなるためのワークに時間をかけ、さらに毎回のグループワークによるものと考える。

グループ分けは、留学生と英語でコミュニケーションをとることに慣れていると思われる履修生を1つのグループとし、あとは学年があまり偏らないようにランダムとしている。

4. 英日両語の併用

この授業は基本的な指示を英語で行うことになっており、特別外国人学生も履修しているため、必要な情報を英語で伝えることにしている。評価基準、欠席時の任意のレポート提出、感染症罹患時の対応と、囃子詞の創作と発表の方法、文化の解説などやや込み入った内容は英語版の資料を作り予め読んでもらい、その都度質問を受けるようにした。履修生の囃子詞を皆で共有することは授業の趣旨からも大切であるため、どこまで表現できているかという問題はあるがすべて英語にし、イラストを付けることで理解の助けとした。

日本の履修生には解説せずとも伝わる部分でも、特に文化的背景が留学生には伝わりにくい。さらに阿波踊りのような伝統的民俗舞踊の文化的側面は、日本の履修生にも伝わりにくい。しかし英語での長い解説は日本語履修生の集中力が低下してしまう。もっと筆者に日英語を臨機応変自由自在に操れる力があったら等々、課題を抱えながらであるが、踊り方およびワークの指示は英語を、文化的解説は日本語を主とし、いずれもポイント部分は英日併用で行っている。幸い留学生の理解力が高いことと、グループ内で日本の履修生が留学生をよくサポートしてくれるので、囃子詞の創作と実技に関しては特に支障なくこれまで授業を行うことができている。

5. 映像資料の提供（Google Classroom の活用）

１日１分自主練の教材および欠席時の補充資料として、全スタイルの踊り方を示した実技動画および阿波踊りが自由な乱舞から統一的群舞に変容する過程を示した解説動画（いずれも筆者制作）を Google Classroom に掲載し、創作囃子詞の課題提出も Google Classroom で行った。但しコロナ禍のオンライン授業ではある程度活用されたが、対面授業が行われるようになってからはほとんど使われてはいないようである。

6. 発表

就活、インターン、感染症罹患などでグループ全員が揃うことは少ない場合が多い。しかし各グループは困難を抱えながらも、創作作品の発表では多様なフォーメーションを考案し披露してくれる。発表日のフィードバックコメントからは、多くの履修生が達成感や満足感を得た

ことがわかる。筆者としてこの時感じるのは、立教生は優秀で優しいということである。次の写真は各グループの発表の様子（2023 年 12 月 20 日、筆者撮影）である。

III. 今後の課題と期待

今回この記事を書かせて頂いたことで、改めていくつかの課題について筆者が認識し対処法を考える機会となった。特に練習内容の配分に検討の余地があると思う。基礎的な足運びはすべてのスタイルの要であり習得に時間もかかるため 11 月初めまでこれにかなり時間をさいてきたが、10 月中頃からは毎回簡単なフォーメーションで踊る練習を取り入れた方が、履修生があきずに練習でき、余裕を持って発表に取り組めると考えた。その他にも細かな課題はいろいろあるが、何とかしたいといつも思うことは、筆者がなかなか履修生の顔と名前を覚えられないことである。これについても来年度は工夫したい。

この授業で行っている阿波踊りには、囃子詞を自由に言いながら踊る、統一化せずに踊る、男性が「女踊り」をするなど、昔の阿波踊りにはあったが現代では行われていない要素があり、ささやかではあるが観光化された阿波踊りとは異なる実践となっている。これは大学で授業として民俗芸能を行う意義の一つであろう。

履修生が将来海外の人と交流する機会があったとき、筆者が授業でやってきたように、シンプルな英語で、一緒に手拍子や「ヤットサー」の掛け声で参加してもらいながら踊ってみせることができたらよいと考え、そう伝えている。履修生が、これまで経験はおろか見聞きしたことがほとんどない日本の踊りの特徴を身体で感じ、囃子詞で思いを伝えあいながら踊る意味や楽しさを感じられようにしていきたいと思う。

「阿波踊り創作作品」発表後の集合写真
（2023.12.20　筆者撮影）

女踊り　　男踊り
（筆者作成）

こばやし　あつこ